

寺田貞次

バーンロミウ地圖製作所

デヨンストン社に並で、Edinburghには、尙一製圖所が在ります、申す迄もなく Bartholomew 地圖製作所であります、デヨンストン社とは全く反對に市の南端に近い、Duncan Streetに云ふ處に在り、デヨンストン社の赤煉瓦の古風な建物であるに反して此處はEdinburghに普通通觀る石造の堂々たる建物で Geographical Institute と稱して居ます。一日訪問すると、社長 Bartholomew 氏の令弟が案内して下した氏は先年世界漫遊の途、我國にも來られた事があるので、一層の親しみを以て懇切に説明して下した、社は二階建て階下は事務室、販賣室、階上が製作室、研究室になつて居る、先づ社長室に Dr. Bartholomew 氏に會する、おちんまりした綺麗な室で、爐石の上には故 Dr. G. G. B. Bartholomew 翁の寫眞が眼を引た。白髮學者風の老翁で、當社の創設者として、英國地圖學界に貢獻した許でなく Scottish geographical Society にも關係を有し、地學上貢獻も少くない、現社長並に自分を案内して下した令弟は、其の令息に當るのである、此室の隣りは細長い室で、圖書室をなし、周壁には書棚

イギリス便り

を備え Scottish geographical magazine を初め、各國の地學雜誌並に案内記等地圖に關する書物を蔵し、室の中央には細長い卓子を置き、引出を備えて地圖を蒐集して居る、尙周壁には地圖學諸大家の肉像寫眞を掲げ、獨國 Petermann の石膏胸像も置かれてあつた、次の室は原圖製作室で窓側に机を並べ、數名の Geographers-Draftsman が製圖して居た、デヨンストン社の場合と同様、緻密な仕事には少なからず驚いた、次の室は彫刻室で、銅板上に地圖を彫刻して居る、之も却々に細密な仕事、蠱眼鏡を使用して彫刻して居る Engravers の一人は若し彫刻に間違が生じた場合にも容易に訂正することが出来る、實地を示して説明してくれて居た、階上は是れだけで、階下に降る、階下は一帶印刷室で廣大な漆喰でかためた床の上に、多數の印刷機が運轉して居る、家の一側を劃して一室をつくり、其處にはデヨンストン社で觀た同質の Lithographic stone を整理する Lithodraftsmen が机を並べて仕事に熱中して居り、其傍の一室には年少の女職工が石板圖上に繪具を塗て居た、此の印刷室の隣りは地圖の仕上室で數名の女職工が地圖に糊をおき麻布を張りつけて

居たデモンストンの地圖と並で英國での良圖 Bartholomew の地圖は光づかくして出来上るので、案内して下した Bart holomew 氏は此の印刷室の一隅に在る事務室で、既刊の各種の地圖を示して、説明され、日本の圖に付ては氏の日本旅行の道筋を示して當時を追憶して居た、自分はデモンストン社では創業者デモンストンの墓所をたづね、參詣もしたからデモンストンと並ぶ Bartholomew 氏の遺跡をもたづねたいと、伺て見た處が氏の故郷がホルチュガルであるので墳墓は當地にはない云ふ事であつた、氏の教示に依るに Lisbon 附近の San Pedro Cemetery Cintrã が其の墓所である由だが餘り邊鄙で參詣の機を得ないのは遺憾であります。Edinburgh で地理に關係のある場所は此の他に Watt College を申すのが在ります、Edinburgh 大學畔で、博物館前に位せる、工業學校で其處に地理科が置かれてあります、教授は Small Commercial Geography を G. G. Chisholm 教授と共に書いた人で、一寸趣味を引たので、鑑覽しましたが、専門の學校でない爲めに、特筆しなければならぬ様な設備を發見しませんでした、Edinburgh に於ける地學關係ヶ所として申し上なければならぬものは、大略右の如きものと考へます

エジンバラと其の四近

暫く Edinburgh に滞在して居ります、最初來た時に考へたよりも、意外に興味の深い處である云ふ事を發見、然かも夫が全くの偶然でない云ふ事を知て愉快に存じて居ります、

す、と申しますのは、元來 Edinburgh と云ふ處は英國では北偏の地ではありますけれども、昔時は Scotland の首府として發達した處で、Glasgow の様に商港でも無く、又工業上に於ける地位もさまで著しくありません、夫で商工業地の様な喧騒はなく、氣候も北偏に似ず穏かで嚴冬と雖、倫敦邊と大差を見ず、積雪と云ふ様な事も少く年中綠草を絶たず、風は幾らか強く、冷ではありますけれども倫敦方面で見ると様な濃霧暗黒と云ふ憂はなく、からりと晴れた空、實に爽快で況や新緑から夏季にかけての氣持に於ておやで、落付いて研究するには好適の土地であります、且英國の南部 England 地方は一帶の平地又は平凡極まる丘陵地のみで、變化に乏しいのに反し、Edinburgh 地方は單なる平地緩斜面のみでは無く、北には大高地 Highland を控へ、地構地質の複雑なる地形上の變化を與へ、地下には石炭其他礦物の産にも富み、科學研究を誘ふ要素を備えて居ます、之は南部地方では得られぬ事柄で、自然研究心を養成し、又研究者を誘集する基となつたらしく、Edinburgh 地方に於て早く各方面の名家を出したのも全く偶然でないと考へられました。

George Buchanan(1506—1532)(歴史家)

Sir Walter Scott(1771—1832), Robert Burns (1759—1796), David Hume(1711—1776), Adam Smith (1723—1790), James Watt(1736—1819), Ferguson (1723—1816), Stewart (1753—1828), Thomas Carlyle (1795—1881), David Livingstone(1813—1881), Robert Louis Stevenson

(1850—1894), Daniel Webster (1782—1852), Hugh Miller (1802—1856), など舉げて見るに未だ一あるでありせう。就中 David Hume, Ferguson, Stewart, Adam Smith の様な哲學者、經濟學者、史學者で其の學說に於て著して地學史上忘れることの出来ない諸大家が揃つて當地附近の所であり Edinburgh 大學に關係ある點は非常な愉快な事で、滞在中は時々其の遺跡を訪ひ、追憶おく能はざるものがあり、また Adam Smith の遺跡の如き、本邦から來られた方は誰でも必ず觀て行かれる處で、日本人と云へば Adam Smith 崇拜者までも思ふものか、名家の肖像を集めたる美術館に行ても之が肖像を案内せられ、古本屋を覗いても Smith の著を示められると云ふ盛況であります、自分は西本願寺の藤音得忍師が來られた際御伴して Smith の生地を訪ねました、丁度 Edinburgh から Fifth of Forth を隔て、其の對岸 Kirkcaldy と云ふ處で海岸の一寒村には過ぎないけれども、Smith 以外に文學者の Thomas Carlyle と Irving の遺跡もあり、單に歴史的に於てのみならず、附近には石炭の産出もあり、特種の工業も行はれ、却々趣味の深い處でありました Smith の生家は町の中心と云ふ可き、街路 (High Street) に沿ふた處に在つたので、今は銀行 North of Scotland Bank) が新に建設され、其の外壁に鐵版を張り其の遺跡を表示して居ります。

House removed here, stood the Birthplace of Adam Smith L. L. D-F. R. S. Author of the Wealth of

イギリス便り

Nations, Born 1723, Died 1790. Professor of moral philosophy in Glasgow University 1751—1764. Lord rector Glasgow University 1787. Commissioner of Customs Edinburgh 1778—1790, the "Wealth of Nations" was written while the Author was resident here 1767—1776, buried in Cannongate churchyard Edinburgh. Erected 1919.

其の一七九〇年 Edinburgh に没するや High Street の Cannongate 寺に葬られたもので、寺は Edinburgh の古町の中に在つて、大學からは程遠くない、當地に來られる知人のある毎に必ず案内もしたので、此等を加へると少くも數度参拜しました。門を入て直ぐ左手が其の墓域で、方三間を劃して鐵柵を繞らし、碑銘明に刻せられて居る、此の寺域には名家の墓蓋も少くなく、此の墓から教會堂に沿ふて北し、墓域の稍低くなつて居る處を下ると、左側に大きな石造の建物が在る、之れが哲學者 Stewart 家の墓である、常に閉鎖してあるから、内部をうかがふ事は出来ないけれども、建物の上部には

Dugald Stewart Hic situs Est.

Filius et Fila, Liberi supesites, Patri Carissimo

Manus supremum, Moerentes, Hoc sepulcrum

dedicaverunt.

を刻してあり、尙寺域の後方に位して居る Carlton Hill と云ふ丘陵上には、巨大な記念碑が建てられ、建物の表面に

Dugald Stewart

Born November 22, 1753,

Died June 11, 1828.

と刻してある、高大なネルソンの記念塔と共に此の丘の異彩を放つて居る、David Humeの遺跡も此の近くでEdinburghの誇りとなつて居る有名なScottの記念塔の前の通りはHumeの居宅の在た處で、今尚David Streetを稱して之を記念として居る、滞在中下宿はDundas Streetで大學に通ふには此處を通らねばならぬので、吾人に一入の印象となつた、墓も意外に近いCarron Hillの麓、墓域中に在るので、是又時々参拜を怠らなんだ、墓域の西南隅に在る高大な石造の圓筒形建物は其の墓壁で、北面して墓門を備え、上に

David Hume

Born April 26 th 1711 Died August

Erected in Memory of Him in 1778

と大書し、内部は平坦で一物を存して居らず、唯内部壁上に一碑板を置き

Sacred to the Memory of the

Hon. David Hume of

One of the Barons of Excheques, and of his sons

John David & Joseph, who he buried Here.

Miss Elizabeth Hume Dead 16th Nov. 1848

と刻してあるのみであつた、然かもMuseum of National Antiquities内に在る肖像集中に見るあのDavid Humeが此處に横はつて居るかと思ふと感深きものかあつた。

地理教材としての地形圖（第二十二）

信濃國小野盆地

参照地圖。五萬分の一、鹽尻及び伊那の二葉、

中央線に乗つて鹽尻驛を去り東京飯田町に向つて來ると暫らくは山際を走つて北方に松本平の展開するを瞰下する事が出来る。然るに善知鳥

峠を隧道で越ねるとやがて汽車は山間の稍濶い平地に出て其の中を細い小野川が流れて居るのが見られる。此の處で人々は此平地に對しては小野川が餘りに貧弱であるといふ様な感じに襲はれるだらう。此の平地が今回紹介されやうとする小野盆地である。小野盆地を過ぎると汽車